

- 65 . 主よ。 あなたは、みことばのとおりに、あなたのしもべに良くしてくださいました。
- 66 . よい分別と知識を私に教えてください。
私はあなたの仰せを信じていますから。
- 67 . 苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。
しかし今は、あなたのことばを守ります。
- 68 . あなたはいつくしみ深くあられ、いつくしみを施されます。
どうか、あなたのおきてを私に教えてください。
- 69 . 高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めましたが、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。
- 70 . 彼らの心は脂肪のように鈍感です。
しかし、私は、あなたのみおしえを喜んでいます。
- 71 . 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。
- 72 . あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

説教

前の「ヘース X 詩篇」で、「主は私の受ける分です」(57)と告白し、「地はあなたの恵みに満ちて」いる(64)ものの、しかしそれがどのように「恵みに満ちている」かを知りたい詩人は、「あなたのおきてを私に教えてください」と祈りました。

続く65-72節の「テース j 詩篇」はこれが主題で、神さまがどのように恵みに満ちておられるのか、その「おきて QXO」を明らかにしたものです。

ここでは詩人は「良い bAj」という言葉を繰り返し使います。「良く」(65)「よい」(66)「いつくしみ深く」「いつくしみを施され」(68)「しあわせ」(71)「まさるもの」(72)と訳し分けられていますが、これらはすべて「良い bAj」という言葉が使われます。様々な訳語からも推測できるように、この言葉はあらゆる意味での「良さ」を意味します。それは十全な良さ、完全な良さ、すばらしさ、最高の「良さ」を表現します。

冒頭、詩人は告白します。「主よ。あなたは、みことばのとおりに、あなたのしもべに良くしてくださいました。」(65)神さまは詩人に最高に「良く bAj」して下さったと言うのです。でもそれは誰の目にも明らかに「良く」見えるものではありません。あくまで「みことばのとおりに」良くして下さったのであって、神さまの目には「良い」ものの、人目には、中でも不信仰な者の目には隠された奥義でもあります。

それで詩人は「よい分別と知識を私に教えてください」と祈ります(66節前半)。この上なく最高にすばらしい「良い」神さまの恵みを理解するには、最高に「良い(bAj)分別(~[j];判断力)と知識(t[;D;洞察・見識)」を要しま

す。それで詩人は、神さまの恵みを見抜く最高の見識を請い願うのです。そして他でもない、この見識は神のことばをそのまま単純に信じる信仰によって与えられます(66節後半)。

信仰によって与えられた洞察力は、それでは一体どのようにして具体的に養われていくのでしょうか。詩人は、それが「苦しみに会う」ことによってであると告白します。「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。」(67)これによると、詩人は「苦しみに会う」前には「あやまちを犯し (gg:v' : 神から離れて罪を犯す)」で生きていたのですが、それが神さまにさばかれて「苦しみに会う」と、そこから教訓を学んで「今は」神のことばを守るようになったのです。こうして、詩人が見識を養われ、神の「おきて」を学んだのは、「苦しみに会う」ことを通してであったと言うのです。

人は誰も「苦しみに会う」ことを好みません。むしろ苦しみに会わずに、平穩無事であることを願います。そしてそれを実現してくれるのが神さまであり、当然そうしてくれるのが「良い」ことだと自分勝手に思い込んでいるものです。でもそれは神さまのやり方ではありません。そして神さまの「良さ」ではありません。罪深い人間は「苦しみに会」わないことが「良い」ことと考えますが、でも神さまの目には「苦しみに会う」ことも「良い」ことです。しかもそれは並の良さではなく、この上なく最高にすばらしく「良い bAj」ことなのです。これが「みことばのとおり」の良さです。人間の誤った「良さ」ではなく、神の「良さ」であり、本当の、真実な、本物の「良さ」です。

このような「良い」ことを行う方がどのような方であられるかを、詩人はこう告白します。「あなたはいつくしみ深くあらね、いつくしみを施されます。」(68前半)「いつくしみ」と訳されるのは「良い bAj」で、直訳すると「あなたは良い方で、良いことをもたらす」となります。つまり、神さまは「良い」方なのです。神さまご自身は「良い」方なので、「良い」ことしかなさいません。人にもたらす幸いも「良い」ことであり、同時に災いも「良い」ことなのです。最高にすばらしい「良い」神さまがなされるわざはすべて、最高にすばらしい「良い」ものなのです。

考えてみれば、神のさばきによって負わされる「苦しみに」といっても、それは実は「審判」と呼べるようなものでは到底ありません。なぜなら、私たち罪人が本当に神さまに「審判」されるならば、即座に地獄に投げ入れられて、永遠に滅びる以外にないからです。私たちがどんなに酷い「苦しみに会う」としても、それは本物の「審判」とは天と地ほどかけ離れたもので、「審判」というよりは、全面的に罪を赦していただいた上での教育的な配慮と呼ぶべきものです。本物のさばきを受けて永遠に滅びないよう、いのちある間に罪を悔い改めなさいという神さまの

愛のメッセージなのです。

それで詩人は「どうか、あなたのおきてを私に教えてください。」と祈ります(68節後半)。そして(おそらく自分が苦しみに会って後に)自分がどのように「あなたのことばを守」っているかを具体的に以下の通りに告白します。「高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めましたが、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。」(69)「塗り固める |p;j'|」は「漆喰を塗る、塞ぐ、隠す、大損害を与える」の意味です。この文は難解ですが、要するに神に敵対する「高ぶる者ども」が、「神は一体どこにいるのか」とか「神がいるならどうしてこんなに苦しむのか」などと言いながら詩人を攻撃したりして、詩人を「偽りで塗り固め」、詩人が事の真実を見えないよう惑わしているという意味でしょう。でも、惑わす者らに取り囲まれた五里霧中の中にあって、詩人は「私は心を尽くして、あなたの戒め (dWQPi : 命令、指示) を守ります (rc;n" : 注視する、監視する、守り続ける)」と告白します。そして、神に敵対する「彼らの心は脂肪のように鈍感 (vp;j' : 太って、愚かの意味)」なのとは対照的に、神さまの「みおしえ (hr"AT : 律法)」のありがたさをまさに痛いほどよく分かっている詩人は、「私は、あなたのみおしえを喜んでいます。」と告白します。これもすべて「苦しみに会う」ことを通して、神さまが詩人に教えてくださった教育の成果というべきものです。

それで詩人は、実感込めて、結論をこう告白します。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」(71)「しあわせ」と訳されるのが「bAj : 良い」で、詩人はここで全くストレートに「神の懲らしめを受けて苦しみに会ったことは、私にとって何より最高にすばらしい良いことであった」と告白します。なぜなら、それによって「あなたのおきてを学」んだから、と言うのです。この「おきて」は先の「ヘース X 詩篇」最後の「おきて qxo」と同じ言葉で、「恵みに満ちている」地に於いて神さまがどのように生きて働いておられるのか、「あなたのおきてを私に教えてください」と祈ったその結論が、ここにあります。それはすなわち、詩人が「苦しみに会った」ことを通して「学んだ」神さまの「おきて」でした。

最後に、詩人は告白します。「あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるもの (bAj : 良い) です。」(72)他の人にはどうであれ、あるいは誰が何と言おうとも、詩人にとって神さまの教え (hr"AT : 律法) は、この世の金銀にまさる最高に価値ある良いもの (bAj) です。そしてそれをもたらしてくれた「苦しみ」もまた「良い」ものでした。

私たちは、どんなに苦しい目に会っても、それで人生終わりだとあきらめたり、失望してはなりません。むしろ詩人のように、神さまを変わることなく信頼し続けなければなりません。罪を犯していない人はこの世に一人もい

ません。ということは、すべての人が「あやまちを犯し」ながら「苦しみに会って」います。日々、毎日、苦しんでいます。でもそれは「さばき」ではなく、神さまの「教育」です。「訓練」です。詩人のように失望することなく、むしろ揺るぐことなく神に信頼し、苦しみながら、一つ一つ神の「おきて」を学んで、最高にすばらしい「良き」人生を生きていきましょう。